

|              |  |
|--------------|--|
| Title        | VIAGGIO DI HIERONIMO DA SANTO Stephano Genouefe<br>及びHo liuro de Nycolao Venetoに関する研究ノート |
| Author(s)    | 林田, 雅至   |
| Citation     |  |
| Version Type | A0   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/94535">https://hdl.handle.net/11094/94535</a>      |
| rights       |  |
| Note         |  |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

### 3. VIAGGIO DI HIERONIMO DA SANTO Stephano Genouefe : 翻訳 :

マイスター(通訳士)ジオバンニ・ヤコボ・マイネルに指示して、ポルトガル語からイタリア語に翻訳したジェノヴァ人

#### ヒエロニモ・ダ・サント・ステファノ記述「旅行記」

我々の不遇の旅による、痛みは一層癒えてきました。とは言え、あなたが私に求めることを満足させるために、私はあなたに以下のように物語る。

さて、ヒエロニモ・アドルノ氏と私がともにどうしてカイロに行ったかを知っておく必要がある。

カイロでは、一定量のサンゴ、ボタン、その他の商品を購入した後、インドに向けて出発した、15日後、カリスに到着し、ケインと呼ばれる良港を見つけた。我々の旅程の途上、異教徒たちの時代に建立された数多の目を見張る建築物が聳える多くの廃墟の古代都市を見つけた。そこには、まだたくさんの神殿が立っている。それ以降、我々は、ケインの地を後にして、陸路で、7日間、モーセとイスラエルの民がファラオに追い出されたときに行ったかの山々と砂漠の地を馬で進み、その果てに我々は、紅海の港、コシル(現在：エルクセイル)に到着した。

そこから、我々は、すべて綱(ロープ)で縫い付けられ、マット生地の帆を張る船舶に乗り込んだ。それから25日間航海し、毎日延着しながら、美しい港に寄港したものの、どこも無人であった。最終的に、我々はマズアと呼ばれる島に到着した。この島は、プレステ・ジョアン(プレステ・イアンニ)国の港があり、島の領主はモウロ人で、陸地から約1マイル離れた紅海の真っ直ぐな海岸線地帯を有している。

我々はここに2か月滞在した後、出発し、上記と同様に海に向かって何日も航海した。その海で真珠を釣る舟をたくさん見た。よく見ると、東洋人のような優しい感じはしなかった。これらの日の終わりに、我々は、船舶交通の往来が盛んで、モウロ人が住む、大陸上の紅海の出口にあるアデンの街に到着した。

その土地の領主はまことに善良にして、誠実で、他の不誠実な領主と私は彼を比較することができないと思う。我々は、この街に4か月滞在し、そこからロープで縫い付けられた別の船に乗り込んだものの、帆は綿生地で、順風にあって、25日間陸地を見ずに海上航海し、多くの島を見たが、寄港することなく、さらに10日間航海し、一層順風に恵まれ、漸くカリカットと呼ばれる大都市に到着した。ここで、胡椒と生姜が栽培され、コショウの木は、他の木に宿り、圧倒的に絡みつくと、全くツタの葉に似て、茎は手のひらの半分の長さで、指のように細く、たわわの粒房は非常にたっぷりしている。それが我々の地域で成育しない理由は、我々が植樹するそれらの木を持たないからである。そして我々に関し

て言われていることは真実ではない。コショウの栽培する、ある時期に燃やしてしまうのである。熟すとそれを収穫したときはヘデラのように緑色で、彼らは食卓に置いて、5~6日でそれは黒っぽくなり、見る見るうちに、表面にしわが寄るのである。生姜、小さな胡桃のように小さく、新鮮な根の部分を植え、一か月後には、大きく成長する。野生のユリに似た葉を有している。

その都市の指導者は偶像崇拝者であり、住民全てもそうである。彼らは牛か太陽のどちらかを崇拝し、また彼ら自身が製作する多くの偶像を崇拝する。彼らが死ぬときにこれらは燃やされ、また異なる習慣・習性がある。彼らが望むものと牛を除くあらゆる種類の動物を殺す。誰かが殺傷したりするとすぐに、彼らがその動物を崇拝するために屠殺してしまう。一方、肉や魚、生きていた動物を決して食べない者もいる。すべての女性が7~8人の夫を所有することは食欲の好みに応じて、許されている。また、男性は処女の女性と結婚することはない。むしろ、生娘と結婚を望むとき、彼は彼女を他の誰かと15日か20日間ともに愛欲の華を咲かせる生活をさせる。この都市には千にも上るキリスト教徒の家屋があり、そこは高インドと呼ばれる。それから、ここを上記の方法同様に建造された別の帆船に乗り込んで出発し、26日間航海し、葉の形状から月桂樹、アンチョ(唐辛子)に似たシナモン(セイロン・ニッケイ)の木が栽培されるセイロン(Zeilan)と呼ばれる大きな島に到着した。ザクロ、ヒアシンス、ネコノメソウが栽培され、他の宝石はそれほどよくない。山にはこれ以上のものはなく、我々は1日だけ滞在した。

その島の領主は、同様に偶像崇拝者であり、彼の民もそうである。ここには、カリカットにも見られるインド産ナッツの実がなる多くの樹木があり、ヤシの木のようなものである。ここを出てから12日後、コロマンデルという別の土地にたどり着いた。そこでは赤いビャクダン(白檀)の木が栽培され、そこにはたくさんの樹木があり、その樹木で家屋が作られている。

その土地の領主は偶像崇拝者で、そこにはまた別の風習がある。一人の男性が死に、人々が彼を荼毘に付したいと望むとき、彼の妻の1人が生身で彼とともに火葬される。これは彼らの習慣である。我々はその場所に7か月滞在した。それから我々は上記同様に建造されたもう1隻の船に乗って出発し、20日でペグと呼ばれる大都市に到着した。ここは低インドと呼ばれる。この街には、1万頭以上の象を所有し、毎年500頭を飼育する偉大な領主がいた。この土地は、アヴァと呼ばれる土地までかなり遠く、そこまで陸路で15日間を要する。その場所では、ルビーや他の多くの宝石を産出し、我々の望みはそこに行くことであったが、当時、ある領主ともう一人の領主の間で戦争があり、誰にもそこに行かせようとしなかった。我々はペグの町で、商品売ることを余儀なくされたが、上で述べたように、偶像崇拝者である土地の領主を除いて、それを買うことができず、そこで、我々はそれを彼に売ったが、それは4000ドゥカートの価値に達した、前述の戦争による苦難と陰謀のために満足のいくものであった。ペグには、1年半滞在する必要があった。そこでは、毎日、領主の家に呼ばれた。その間、寒さと暑さ、大いなる艱難辛苦、そして青褪め

た顔色のヒエロニモ・アドルノは、こうした苦勞に耐え難く、彼を大いに悩ませた持病が重なり、55日間、医者にもかかれず、薬もなく、聖ヨハネの夜、1496年12月27日、我が主なる神に靈魂を返すことは彼に相応しいものとなった。そして、たとえ彼らが彼に教会の儀礼を提供できなかつたとしても、宗教者がなく、彼の悔恨と忍耐、そして彼が常に維持してきた彼の素晴らしい人生によって、私は主なる神、我らが神が樂園に彼の魂を受け入れてくれると確信し、私は神に祈祷し、そして絶えることなく罪の穢れなき彼の体を廢墟の教会堂に埋葬した。彼の死によって私は大いに苦しみ、悲しみに打ちひしがれたことをあなたに断言する。そうした大事の前に、私は立ち去らなかつた。しかし、それ以来、私は、私を苦しめ、私を去らせることなく、癒しの薬もなかつたが、何人かの善良なる男性に慰められ、私は普段の日常生活を回復しようとした。これが私のしたことであり、多大なる苦痛に苦しみ、それなりの費用がかかった。私は乗船し、マラッカに向かい、25日間航海し、ある朝、天気あまり良くなかつたので、スマトラと呼ばれる非常に大きな島に到着した。そこに多くの胡椒、正絹、胡椒(長)、ベンゾイン(安息香)、白ビャクダン(白檀)、及び他の多くの香辛料があつた。そして船主は他の船員や商人とともに、天候が最悪であるために、助言し、動揺しながらも、慎重に我々の強奪品の荷下ろしをした。モウロ人である領主は、他のすべての土地で理解される言語と異なり、我々は我々の異なる言語を以って、我々の商品をこの土地に置いた。領主に対して疑問がわいた。彼に私は、私の相棒が亡くなり、すべての商品はここにある。彼には子供がなく、また兄弟もいないと言うと、領主はそれは自分のものになる。彼は私とともになすべきことを考え、即座にすべてのものを差し押さえる命令をした。私の所有物も調べ上げ、300ドゥカードの価値ある、相棒が買い求め、領主が取り上げたルビーがあつた。これらはすべて領主のものとなり、カイロから持ってきた品物が、部屋に置かれ、記録通りのものであることが真実であるかどうか確認されるまでそのままとされた。そこにイタリア語の知識と知性を備えた裁判官(友人)がいて、神の助けと彼の支援で、大変な苦勞と大いなる幸運でうまく切り抜けた。ルビーは没収されたものの、持ち前の親切な心持で、ここは良くないと判断し、出発を決断した。所有していたすべての商品を売却し、絹とベンゾイン(安息香)に替えた。

私は船に乗り込んで、25日間航海し、カンバイアに戻つた。天気が良くなかつたので、我々はモルディブ(マラバル)と呼ばれる諸島に到着した。7千から8千の島々に島民もなく、小さく低地の島であつた。ほとんどの場合、海水が入り込み、島の間隔は1マイル半。そこには無数の島民がいて、全員黒人で、裸であるが、健康状態に優れ、機敏で、モウロの信仰(イスラム教)に篤かつた。すべてを支配する一人の領主が存在した。そこには大きな果実をつける樹木があつて、彼らは魚とそこに運ばれる僅かの米を食糧にして、暮らしていた。この土地で、出発する適切な時期を待って、数か月滞在する必要があつた。私が到着し、我々の村に行くために、船をそのままにした。私の不幸は、既に多くの不幸が積み重なり、限界を越え、一層大きくなつた時、8日間の最後に、5日間続いていた雨が上がり、海の幸運が手繰り寄せられたので、船はすべて水で満たされていたが、幸運にも損壊なく、

船を捨てることもなかったもので、船底に行ってみると、泳法を心得た者は全員救われ、そうでない他の者は溺死していた。主なる神は私に、朝から晩課まで海面を漂わせ、太い木片に掴まれるようにさせて下さった。神の御加護にこの上なく相応しい時である晩課に、我々に合流しようと出発した3隻の船が5マイル進み、我々の不運な苦境を知り、即座に彼らはボートを用立て、接近し、彼らは、私も含む生存者を引き上げた。生存者の我々は思う通りに船に分乗した。私はその船の一隻に乗り込んで、カンバイアまで行った。その領主はモハメダン(イスラム教徒)で偉大なる領主である。漆と染料インディゴ(青藍)は、この地から始まって、生産される。ここで私はアレクサンドリアとダマスカス出身の数名のモーロ人商人に出会った。彼らによって、私は出費のための金銭支援を受けられた。それ以来、私はダマスカスの商人保安官と契約を結び、1か月彼の警護の下、村に滞在し、オルムズまで行った。この土地には豊富な良質の真珠があり、安価であった。60日留まって、持ってきた商品のすべての負債を返済し、そのことを警察官に託した。ここを出発して、アルメニア人とアザミ人の商人たちとともに、何日も経て、アザミの国に到着し、1か月滞在、隊列(キャラバン)に合流するのを待って、隊列とともにシラスに来た。3か月間続いた戦争のために逗留し、出発後、私はパーン(Spaan)に行き、そこからカーファン(Cafa)に行き、次にソルタニーエ(Soltania)の都市に行き、そして最後にタブリーズ(Tauris)に行った。道路が戦争のために安全ではなかったため、タブリーズから私はアレppo(Aleppo)に来たのである。途上、キャラバンに合流していたが、私は剥奪攻撃を受けたが、キャラバンにいたアザミの商人に助けられ、アレppoに連れて行ってくれた。ここで多くの商人が私の周りにいて、宝石、絹、真紅を購入するために再びタブリーズに戻りたいと懇願した。そして彼らは私のために盛大なる祝宴を催した。しかし道中が安全ではなく、結局私はそこに行くのは諦めた。

これは、私の罪のために私に降り掛かった不運な船旅全体の成功譚である。そうでなければ、私は自分で稼いだものに非常に満足したことが分かったであろうか、また同行者とともにいながら、私は誰をも必要としなかったと思っていたことをしっかり振り返ることができたであろうか。しかし、幸運を遮る存在は一体誰であるのか？それにもかかわらず、私を生き延びさせ、私に恩恵を与えてくださった我が主なる神に尽くせぬ感謝の気持ちを捧げる。どうか私をよく見て、守っていただけますように。

1499年9月1日にトリポリ・ディ・ソリアで執筆した。